中世禅宗の土地伽藍神について

——建長寺・永平寺像を中心に——

広瀬良文

道元は、『正法眼蔵』「安居」によれば、宋代撰述の『禅苑清規』に基づいて「護持正法土地龍神」を祀り、土地堂念誦を行っている。また、天童山や径山でも「太白龍王」「広沢龍王」という龍神が祭祀されていたことが既に先学により指摘されている。土地神たる龍神が伽藍神としての役割も果たしていた例であろう。その後、永平寺二代懷奘の指示により、日宋諸禅林を視察した義介は永平寺に三尊仏、祖師三尊、土地五軀を祀ったという。永平寺仏殿内右にある土地堂には二体の土地伽藍神が現在も祀られている。一体は、大権修利菩薩である。もう一体は、像容からすれば、近世に黄檗の影響もあり作成された華光大帝像であるが、華光大帝を祀っている意識は永平寺に無い⁽¹⁾。意識としては「土地伽藍神」であり、具体的には「龍天護法大善神、大権修理菩薩」の二体であるという（『祖山行法指南』）。なぜ華光大帝が安置されているのか。重要なのは具体的な「華光」という神格ではなく、それが明において一般的な土地神・伽藍神だったことである。そ

れ以前の土地龍神祭祀を引き継いでの華光大帝安置ではないかと考えたい。華光大帝像の前には円月江寂により、「仏勅護持護法伽藍善神王」との牌が置かれている。「護法善神」程度の意味であるこの像名は重要である。道元が祀る「護持正法土地龍神」あるいは『瑩山清規』所収の回向文にある「護持正法土地竜神」「当山竜王」などの龍神が曹洞宗の伽藍神祭祀の理念的基底にあるのは疑いなく、義介の五体の伽藍神像の中にも存在したと推測され、さらに江戸期に華光大帝が安置されたものの、現在の行持の回向文においてもあくまで意識はそれ以前の、単なる土地神・龍神である。なお中世より回向文と作像が対応する事例として東福寺があり、その草創より仏殿には四天王・十八天像が祭祀され（『沙弥行惠家領処分状案』、『慧山古規』所収の回向文と、伽藍安置の神像の双方で祭祀されていたとみられる。東福寺はそもそも禅密併修の寺院として創始され、「東福寺」という名に象徴されるように東大寺・興福寺をはじめとする先行の京都・奈良周辺の顕

密寺院に神仏の祭祀も寄り添ったと見え、道教神を主として祭祀する後述の建長寺等の禅林とは異なつた造像がみられる。当然であるが、如何なる神を祀るかにも禅僧の個性あるいは期待される寺院の性格が表れよう。さて、同じく鎌倉期より存在する禅林の一つ、鎌倉建長寺の現存五体の伽藍神について述べる。この五神は作像年代は古いが、いつから建長寺に祭祀されているものかは定かでない、またその神名も謎が多い。建長寺を開創した蘭溪道隆は、『蘭溪和尚語録』「歳日上堂」に、伊勢・祠山等の神を護法神として挙げてゐる。祠山(張)大帝は中国の土地神である。蘭溪と祠山とが中国において深い関わりがあり建長寺に祭祀したとする説話は、既に『蘭溪和尚行状』等に見え、蘭溪が祠山をもたらしたとみてよい。また建仁寺(建寧寺)における入院法語には、南泉と土地神の逸話がみられるが、いかなる神を祭祀したかについては言及していないが、おそらく建長寺と同様に祠山を祭祀したであろう(『蘭溪和尚語録』)。しかし、祠山以外の伽藍神も祭祀したかは不明である。また竺仙梵僊の建長寺入院法語には、「土地。祠山張大帝。天下鬼神爺」とあり、祠山の名しか挙げられていない(『竺仙和尚語録』)。天文二十年(二五五二)に建長寺を訪ねた僧智旺によれば「本尊千体地藏。大磬在之。土地堂張大帝、威風凜烈、眼光射人。其鬚ハ唐ヨリ大覚袖之来而付之」という(『明叔録』『妙心寺派語録』

卷二)。このことから、鬚に植毛跡のある通称1号像が建長寺の仏殿兼法堂で安置されていた祠山像となる。祠山しか言及されていないので、他に神像が安置されるのは、先行研究の指摘通り、この後に、他所から移管された仏像と混合して後、さらに年代が降る可能性がある⁽²⁾。しかし、複数神祭祀であつても「鬚」が特徴となつて祠山の見分けが付いたとも考えられる。ただ、他寺においても祠山のみと言及されることが多く、戦国期、大休宗休は、駿州臨濟寺が「張大帝」(祠山)を祀り(『見桃録』)、また江戸初期、以心崇伝は金地院にて、自らの位牌の「祠山同前」の祭祀を遺言しており、祠山一体のみの名をもつて土地堂を指している(『御遺言之覚』)。また『建長寺史末寺編』には、建長寺派諸寺の江戸期の什物書上が載っているが、「大権」ばかりの名があり、さらに伽藍神を祭祀しない寺もみられる。これらの寺院のように、建長寺でも中世は一像のみの祭祀であつた可能性もある。しかし一方で、鎌倉期より既に寿福寺等において土地堂への複数の伽藍神像祭祀があつたことも事実である。鎌倉期の来朝僧、大休正念は、寿福寺において、摩訶修利、白山、祠山が土地神であると述べる。先行研究によれば摩訶修利は大権修理であり、白山は中国天童寺の太白山の神ではないかとされている⁽³⁾。また、正念の弟子、秋澗道泉(一一三三)には、「龍峰庵」(現建長寺塔頭、龍峰院か)に釈迦像を安置した際の法語と、それ

に続き諸像安置の法語がある。引き続き龍峰庵においてか別所では不明だが、「大帝安座」と題し、「恭惟、祠山聖烈大帝（中略）。且道、居是第幾位。良久云、低声々々、墻壁有_レ耳」とあり、続いて「土地堂（五所）」と題し、「本州有又他州有。五位正偏_{（偏）}示交通」とある（『秋澗泉和尚語録』）。両語がともに「位」を問題にしており、本州と他州の譬えも、祠山を本州、他の土地神を他州としているとすれば両者が関連しており、同所のものとしてよいか。祠山が中心的存在でありつつも、牌を立て複数の土地神を祭祀しており、建長寺にも同様の祭祀があったとしても不思議はない。また、『建長寺諸回向並疏冊子』所収の中世の回向・疏には諸神名がみえる。同書に正和五年（一一三六）の「仏殿立柱疏」が収録されており、「本寺護法祠山正順大帝、阿育王山仏伽真身護法王大権修利菩薩、殿下李王二太尉、丁壬二使者、合堂真宰」とあり、祠山が本寺護法神とされつつも、大権修利、祠山の眷属神等も儀礼に勧請されていた。「_レ」による省略部分を推察する必要があるが、同書「土地堂」回向に、「大宋国護法祠山正順昭顕威徳聖烈大帝、大権修利菩薩、伽藍土地護法冥王、掌簿判官、感應使者、日本国伊勢大神宮…中略…護伽藍神合堂真宰」とあり、「修正会満散疏」に、「当山土地護法祠山正順昭顕威徳聖烈大帝、仏伽真身護法王西天普現大権修利菩薩、伽藍土地護法冥王、掌簿判官、感應使者、殿下李

中世禅宗の土地伽藍神について（広瀬）

王二太尉、丁壬二使者、年月日時奏事童子、直符使者」とあり、これらの神が該当しよう。つまり、回向からすると必ずしも中世にも祠山のみ祭祀であったと断定できず複数の神が挙げられる。中世から建長寺に複数神が祭祀されていたとするならば、祠山の眷属神たる①祠山②③李王二太尉④⑤丁壬二使者の五像のパターンもありえるが、両者に共通して勧請されている①祠山②大権修理菩薩③伽藍土地護法冥王④掌簿判官⑤感應使者の神が祭祀されていた可能性が高く、また像容からも後者か。ただし、建長寺と同系統の神名を挙げる回向文は、南禅寺・円覚寺をはじめ各地の臨濟宗寺院に伝播しており、『諸回向清規式』（二五六六成立）にも、京都周辺と推測される寺院の土地堂回向が載り「本寺護法祠山正順昭顕威徳聖烈大帝、大権修理菩薩、土地護法冥王、掌簿判官、感應使者」が祭祀され、祭祀の像には寺院により異同があるが、これらが理念上ではいわば伽藍神祭祀の基本パターンとなっていたことがわかり留意が必要である。『南禅寺諸回向』は「伽藍土地護法冥王」と表記する一方、「伽藍土地護法明王」ともし、南禅寺の伽藍神は、祠山大帝・大権修理・護法明王と伝わる。妙心寺でも戦国期には、漢詩・禅に通じた「東坡居士」と「護法明王」が土地堂に祭祀されていた（『見桃録』「妙心寺入院法語」。「明王」と「冥王」は類似し、「護法明王」のほうが一般的であるため、実際に明王の祭祀と結びつく場

一九七

合も考えられ、冥王・明王のどちらが元であるかを断定するのは難しい。しかし建長寺で冥王と伝え、禅林に道教風の神像が多く祭祀されることを重視すれば、冥王の表記も間違っているのではないだろう。龍神（龍王）ではなく冥王と表現する理由は、道教で泰山府君や冥王などが祭祀されたことに由来するか。『建長寺諸回向並疏冊子』所収の、鎌倉期の「仏殿供養疏」に「下界地藏能仁、酆都大帝、閻羅天子十殿冥王」以下の地藏と習合した道教神への回向がなされ、建長寺本尊地藏に冥王との観念もうかがえる。もし冥王が建長寺の伽藍神像に該当しないとしても、広く臨濟寺院の回向において祭祀されていた「土地護法冥王」という存在について考える価値はあろう。冥王は、唐宋でも特定の土地に祭祀された神というより、どこにでも祀られうる神であったろう。また、正念が「白山」と認識した神も、宋代土地神一般にみられる姿容であっただろうから、太白山の龍神だったかどうかは実のところ定かでは無かる。むしろ永平寺と同様、いわば宋代一般に広く祭祀された龍神や冥王などの民間信仰の土地神を禅林が採取し護法神としたものであったとすれば、鎌倉以降、臨濟寺院や曹洞寺院においても、特徴的な像容や神名を有さず、あるいは天童山の「太白龍王」等のように固有名を有するも本質的には如何なる土地にも祀られうる龍神のような、つまり宋代一般の土地神の神格・像容を持つ神々が回向・神

像双方で導入されていても不思議ではない。招宝七郎などの個性的な像容の伽藍神の祭祀が目されがちであったが、龍神など一般の道教神も日本に流入してきていたと考える。二階堂氏も太白龍王が祭祀された可能性を指摘している⁽⁴⁾。それではこうした没個性的な龍神などの土地伽藍神像は現在どこにいったのか。たとえば寿福寺の伽藍神像の像名の中にその名を残さないように、祠山などと混合されつつ祭祀されているのではないか。曹洞宗にも、江戸期のものだが招宝七郎の形を取らない把尺の神像を祭祀する三重仏光寺もあり、そうした寺院にその姿を留めている可能性もある。

- 1 浅見龍介「調査報告」永平寺の中世彫刻」（『MUSEUM』六二九号、二〇一〇）。
- 2 田中知佐子「建長寺伽藍神像をめぐる一考察——中国風伽藍神像の系譜から——」（『佛教藝術』三〇一号、二〇〇八）。
- 3 二階堂善弘「海を越える伽藍神——日中五山の伽藍神の比定——」（『関西大学東西学術研究所紀要』第四五輯、二〇一二）。
- 4 二階堂氏前掲論文。

〈キーワード〉 龍神、土地神、冥王

（駒澤大学大学院）